

## 8. 結び

さらに続けたい点や、発展させたい点は多くあるが、一応初期の目的は達成した。ちょうど化学物質問題が社会の注目を集めた時期と重なったために、研究結果も広く社会に知られることになった。また、外国でも認められることになった。このプロジェクトが始まるまでは、わが国のリスク研究は全く知られていなかった。これを契機に、欧米の国にないリスク科学があるということが知られるようになった。その一番のルートは、国際ワークショップを開き、そこに外国の有力な研究者を招待したことだった。

もし、我々が paper を書く、国際会議で発表するという手段に頼っていたら、知られるまで時間がかかり、しかも、強い印象を与えることはできなかったと推察される。国際ワークショップで、一括して発表できたこと、それを招待者に全部聞いてもらえたこと、聴衆が多く、日本の国内で評価されていることを肌で感じてもらったこと、同時通訳のため、日本人ものびのびと議論ができたことが挙げられる。

このため、二つの成果があった。

一つは、米国での生態リスク評価モデルの現状と評価の中で、我々の研究が大きく取り上げられたこと（引用文献は、すべて国際ワークショップの proceedings であった）、もう一つは、Chemosphere という journal（Elsevier から出ている国際的な学術雑誌）で、我々の研究の特集号を出すことが決まったことである。

では、有力な外国の研究者に来てもらえるか？ということだが、いくつかの条件を満たせば来ていただけると思う。大事なことは、こちらが日本で影響力のある人物だという情報を送ることだと思う（もちろん、既に主催者が国際的に広く知られていれば、それに越したことはない）。

5年間、この研究に専念できて大変嬉しかった。その点で、科学技術振興事業団の CREST 研究助成に大変感謝している。

良かった点を以下に挙げる。

- 1) 研究費が潤沢で、他の研究との掛け持ちをせず、専念できたこと。
- 2) 研究費の使い方の自由度が高く、効率的であった。特に、これまでは認められなかった海外での調査費、民間の外部分析機関への業務委託などが認められたこと。年度の切り替え時も研究費が使えたこと。大学の研究室の整備にも使えたこと。
- 3) PD の雇用ができたこと。
- 4) 事務員、補佐員などの雇用が認められ、一応人間的な処遇をすることができたこと（給与、保険など）。これは、とても嬉しい。他の研究費では、

こういう職種では年 100 万円程度の支払い（所謂バイト）しか認められていない。これでは、責任をもって仕事をして貰うことはできず、結局研究者の雑務が増える。また、国の研究費が、こういう悪い労働条件での雇用を強制することが、許されていることについても、疑問がある。

- 5) 大学院生にも、日当を払うことができ、研究の能率を上げることができた。
- 6) ワークショップの費用、同時通訳の費用を認めてもらったこと。
- 7) 外国からの招待者に、ビジネスクラスの旅費を認めていただいたこと。
- 8) 研究成果の評価も厳しそうに見えて、気持ちよかった。

#### 問題点

- 1) 事務処理は、最初は柔軟だったが、暫くすると官僚的になる、苦情を言おうと、また、良くなり、暫くするとまた、官僚的になるの繰り返しであった。官庁や大学の退職者が、多く事務官をつとめることに問題があると思う。
- 2) 金額が大きいだけに、多くの人が目に付け、既存のヒエラルキ（学会など）の中に取り込まれつつあるように思う。是非、新鮮な目で審査するということを守らないでほしい。

ともかく、20名近い研究者が、リスク研究者として育った。いくつかの核として残し、育てたいが、いい方法があるかについては、まだよく分からない。しかし、ともかく、日本のリスク研究の始まりをCREST 研究は作ったと思う。本当にありがとうございました。

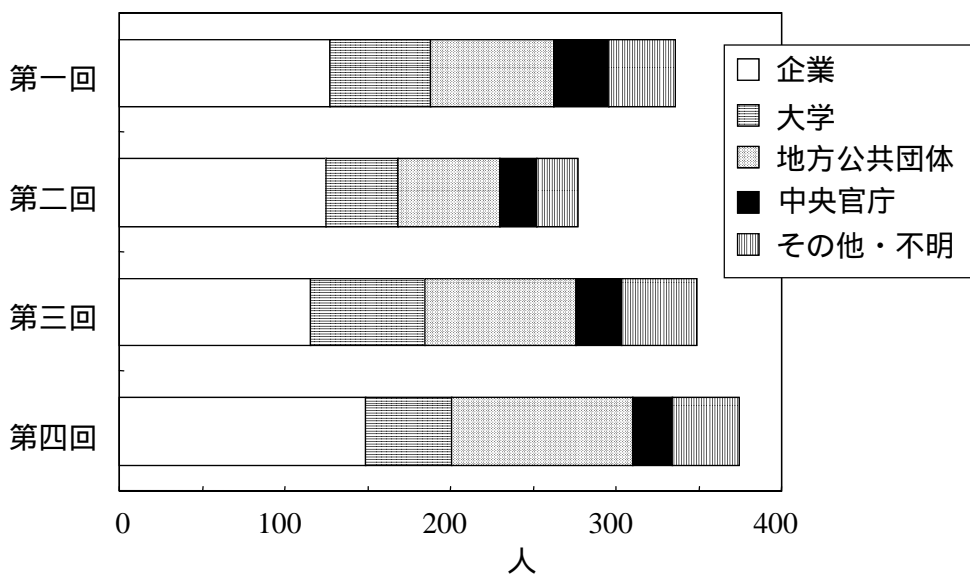


図7 - 5 - 1 . 国際ワークショップ出席者の所属別分布